

尊厳は自分で守れ

何がその人にとっての尊厳なのか、本人しかわからない。

ならば、本人が自分で守ればいい。

誰かに守ってもらおうと期待するから裏切られる。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

1. 尊厳は守ってもらえるものなのか？

尊厳というものは、関係者が守ってあげるものだと考えてきた。しかし、これでは事態は進展しない。障害者施設での不祥事を見るにつけても、本当に何も変わっていない。

尊厳は誰かに委ねるのでなく、自分が守ればいいのかと考え方を変えてみたらどうか。しかし自分が守ると言うけれど、そういうことが本当にできるのか。

(1)なぜ自分のための福祉を自分でするのか

ある銭湯に毎晩、認知症の女性が通ってきて、客の服を畳んでいる。おそらくこれをすれば、心が落ち着くのだろう。認知症になる前、彼女の日課の1つが朝の洗濯で、乾いた服を1枚1枚、きれいに畳んでいく。その行為が彼女にとって何か意味があったのだろう。

そうやって毎晩、銭湯に通いながら自分で自分を癒している。自己福祉ではないか。自分のためにいいという行為を本能的に見つけ出す。

それにしても、なぜ自分のための福祉を自分でするのか。

究極のところ、その人の問題は、他人にはわからない。
その問題の解決策も他人にはわからない。
だから自分の手でするより仕方がない。

銭湯に通ってきている彼女は、それを知っているのではないか。周囲の人は変なおばさんが変なことをやっているなど見ているだろう。「でもこの私にはわかる。今私の心を落ち着かせるにはこれっきゃないということだね」。

(2)尊厳が傷つけられていることは他人にはわからない

同じようにして、

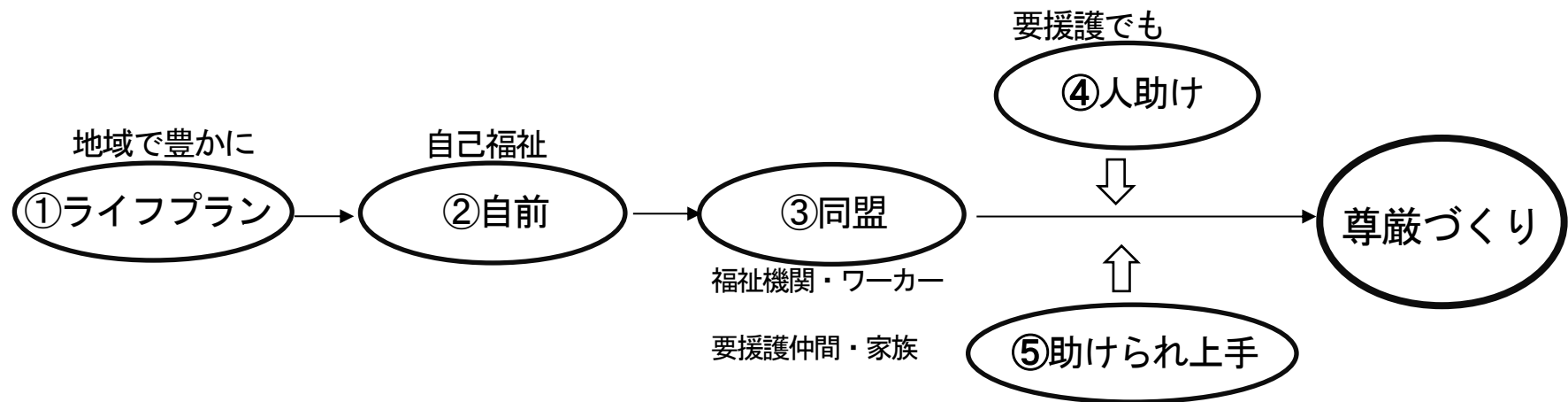
自分の尊厳が傷つけられていることは他人にはわからない。
その尊厳を守る術も他人にはわからない。

結局、自分の尊厳がどのように傷つけられているかを点検し、それはどのように守ればいいのかを自分で考え、最善の方法を実行するよりほかはない。そう、尊厳は自分で守るということだ。

2. 尊厳を自分で守る一般的なモデル

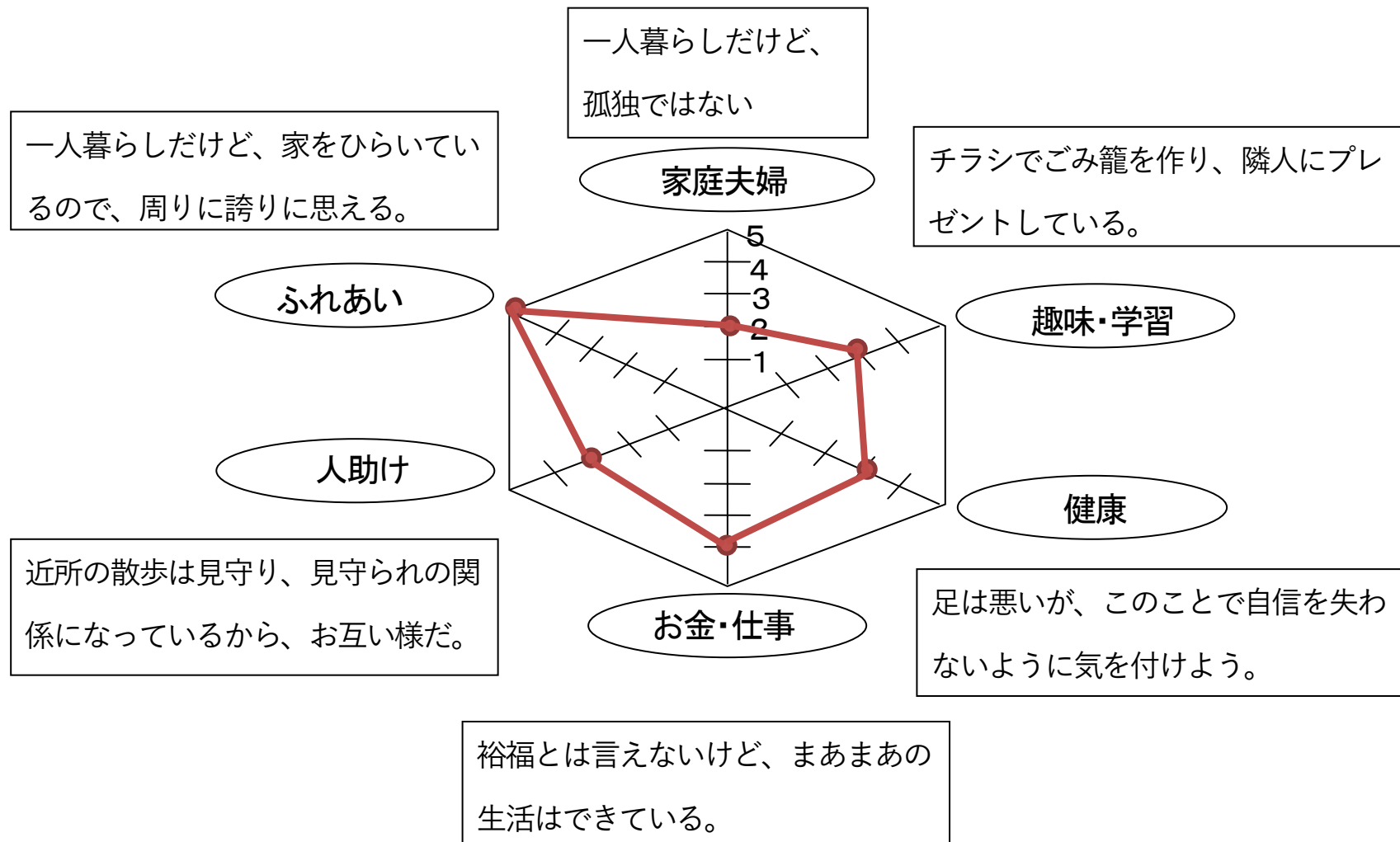
ここに自分で自分の尊厳を守る一般的な手法を描いてみた。

尊厳を守る当事者の一般的な生き方モデル



①は尊厳を守る生き方。豊かな人生をめざす

病気・障害・要介護などのハンディを抱えても、生涯現役・社会参加・自立生活を継続。



豊かさダイヤグラムに自身をのせてみる。項目は健康のみならず、仕事・社会活動・ふれあい・家庭夫婦、趣味の6つ。要援護でもこれらの全てが充足できるように務める。ただ生きているだけでもいい、では、尊厳を維持する意味がない。細かな点でも尊厳を失うことがないように配慮する。

②自己福祉。自分を守るための福祉を自分でつくる

面白いもので、福祉活動というのは他者のためにやることだと思っている人がほとんどだ。そうではなく、福祉はまずもって自分の安全を守るための行動なのだ。地域ではたしかに、自分を守る行動が圧倒的に多く、しかもその行動はエネルギーギッシュで、しかも効率的で、スピード感に溢れている。

③自分の力だけでは守れない場合、他の仲間と同盟する。当事者仲間だけでなく、支援してくれるワーカ

ーや家族、住民などとも同盟する

いわゆる「支援者」だと尊厳を守ってくれる保証はない。それより同じ当事者という立場で同盟するのがよい。ワーカ一の方々にはこのことをよく意識していただく必要がある。

④人助け。自分も助けてもらうが、できるところは自分も助ける側に回る

誇り高い要援護者は、積極的に人助けを実践する。その結果、更に助け手が押し寄せてくる。「要介護になったら、そろ

そろ人助け」だ。

⑤必要な時は助けを求める。助けられ上手になることは、誇りを守ることだ

「助ける」と「助けられる」は、福祉という営みの共同作業をしていることになる。今は助けられる側がやるべきことをやっていないので、助ける側が非常に困っている。むしろ助けられる側が「こうしてほしい」と上手に導いていくのが本来のあり方なのだ。

(1)自己福祉の実践がなぜ尊厳保持に繋がるのか

これらのこと自体、尊厳づくりに直接関係はない。それでもこれが尊厳保持につながるのは、例えば、自己福祉。自分の身を守るために、まず自分の手で解決努力をする。これが自分の誇りを守る手立てにはなる。自己福祉などと言うと、そんなことができるのかと思うかもしれないが、当事者はまずもって自己福祉に取り組むものなのだ。ご近所で何か困り事が生じた時、彼らは当然のように自己福祉に取り組む。その行為は水面下で行われているので、何もしていないように見えるが、あとでマップを見ていただければわかる。

③の同盟も、彼らなりのやり方で実践している。みんなと一緒にやるのではなく、表面的には個々バラバラに動いているが、実質的には同盟になっているのだ。これなどは彼らの尊厳を守る直接の方法と言える。

この同盟の中には、彼らを支援するワーカーなども入る。最後に、④の人助け、⑤の助けられ上手、この2つを駆使し

て仲間を増やしていけば、尊厳を守る手立てにはなる。

(2)欲しいのはワーカーというより同盟の同志

要するにたった1人で自分の尊厳を守るというのではなく、自分に対してきちんと責任のある生き方をする、自分でできることはできる限り自力で頑張る、共に仲間と同盟したり、助けたり助けられたりもしながら、具体的な尊厳保持の行動を取る。これらの努力をすれば、誰にも後ろ指をさされることもない、ハンディキャップを抱えていても、堂々と生きることができる。これだけのことをやっけて、いじめや暴力、虐待を受けるとなれば、これに対抗するすべも出てくる。それが同盟の仲間であり、助けてくれる人であり、こちらが助けた相手でもある。孤独ではないのだ。

繰り返すが、このフローの中には、ワーカーなどの支援者やアドバイザーは不要である。欲しいのは同盟の同志だ。当事者ではなくても、自分の尊厳を保持するために、このフローと同じ実践を繰り返す人物でもいい。

(3)助け手が欲しい場合は、「抱き込み」作戦がある

要援護状態にある人が、こんな生き方をこなせるのか、疑問に思われるだろう。例えば認知症の人などが地域で出歩いたりする場合、誰かに支援を求めている。例えばグループ活動をしている人たちに「私も入れて」と言ったり、こちらから話しかけて、半ば強引に返答を要求したり。こういう行為を私は「抱き込み」と言っている。だからこのフローチャートのいずれでもいいから、誰か助け手が欲しい時、この「抱き込み」の手を使うのだ。

体の大柄な要介護の夫の移送支援グループを主婦が立ち上げたが、同じご近所で自分も同じ支援を必要としていたら、この主婦を「抱き込む」とか。ご近所同盟をしている仲間を抱き込んで、自分もそこに参加させてもらうとか。

1.野球は、打って、投げて、走って、完全だ

野球で二刀流を実践している大谷翔平選手が人気だが、彼の生き方を見ていると、野球というものは、打って、投げて、走って、完全なのだと彼は思っているのではないかと感じる。大リーグの元有名選手が、「まるで12歳のリトルリーグの少年がそのまま大リーグのグラウンドに来ているみたい」と笑っていた。

(1)大谷選手は野球で美を追求している？

そして、彼は何よりも野球を楽しんでいる、とも。そう、野球は、打って、投げて、走って、だから面白いということなんだろう。元中日ドラゴンズ監督の落合氏が言ったのも同じで、彼はどうしてこんなこと（二刀流）ができているのかと取材陣に尋ねられて、「彼は何よりも野球を楽しんでいる、その一言に尽きる」と。本当の意味の「野球」を楽しんでいる。ただの指名打者だったら、エネルギーも温存できるし、打率も上がるだろうが、彼はそれで本当に野球を楽しめるのか。

大リーグを専門に取材しているジャーナリストが言っていた。「ピッチャーのユニフォームが泥で汚れているのを見ると鳥肌が立つ」と。前回に打者としてグラウンドを走り回り、滑り込みをしてきた。その汚れたままのユニフォームで次のマウンドに立つ、そして三振の山を築く。

彼の走塁自体も、私は美しいと思っている。滑り込みのやり方はまるでダンスをしているみたいだ。いやそれは走塁に

限らない。投球も打者としての振舞いも、彼はダンスをしているのではないかと思うときがある。彼は「美」を野球で表現し、それで1人楽しんでいる。バットフリップという言葉が話題になっている。彼がホームランを打った瞬間、特に「確信のホームラン」の時、彼はバットを軽く投げ出す。これが美しいという。

(2)専門分化に慣れ親しんだ人たちには大谷クンのやり方は時代錯誤？

だが、アメリカの大リーグ関係者にはこの二刀流は不評であるらしい。私にはその理由が理解できなかったのだが、この頃分かってきた。今の文明社会は専門分化されていて、それが野球にもストレートに転用されている。投手も中継ぎやクローザーだけでなく、左バッター対策のために、その人への対応だけでマウンドに上がるワンポイントリリーフも。そういうのを見ているうちに、私たちは専門分化というものを学ばせられるのだ。

二刀流の無理(?)が影響してか、体のあちこちに故障が出てきた。この時とばかり、「だから二刀流は無理がある」と苦言を呈する大リーグのOBが増えてきた。しかし元ヤンキースのジーター氏は、二刀流主義を曲げていない。大谷選手もそうだ。彼の情報をネットでいろいろ読むが、彼の本意を誰も理解していないようだと思っている。たしかに大リーグのレベルで打者も投手も一流を続けるのは、それこそベーブルースしかこれまでもできなかったことだ。それを続けるのは、これが彼の野球哲学だからだ。例の「野球は打って投げて」というやつである。その時、野球の真実が体得できると彼は確信しているのではないか。危なくすると、大リーグのエース級の実績を上げている投手がホームラン王になるかもしれない。まさに冗談みたいな話だが、そういうたぐい稀な能力に恵まれた彼にして初めてなしうること、それは今世

紀の課題とも言っている、統合の実現である。

数世紀にもわたって人類は分業をよしとして来た。何でも分別する。分別された人間は、その欠点を自覚しない。自分は専門家で、そうでない人よりも立派なのだと。

そうなのだ、私たちはみんな分別、分業された世界の一部として生きていて、総体の人が体得できた本物の真実に永久に触れることができない。本物の真実なんてあるのか、と思われるだろうが、エンゼルス試合を見ていたら、面白い場面に出くわした。勝ったチームとの間に大きな点差ができたので、負けたチームの投手は引き揚げて、野手が投手役を担い始めた。それが、山を描くような緩いボールを投げるのだが、面白いことに、バッターがあまり当てられない。投手役をしている選手も、半ば笑いながらの粘投である。それを観衆も笑わずに見ている。私が感心したのは、「にわか投手」が本当に楽しげに投げていたことである。やっぱり野球は投げて打って走ってが本物なのだ。

それにしても人間はどうしてこんなに欲がなくなってしまったのだろうか。自分はボランティアだと公言して、活動家であることを隠さない。一方で、たまには助けてもらう側になってみたいものだとは思わない。助ける一方なのだ。

一人暮らしで88歳の女性の話を私はよく取り上げる。彼女の面白さは、助けと助けられの間を生き生きと行き来していることだ。例えばワーカーにリハビリをしてもらっている時に、そのワーカーの愚痴を聞いてあげる。仕事が面白くない、もうやめようと思うと言うワーカーに、「私は定年まで数年というときに交通事故に遭って障害のある身体になったけど、夫の協力で勤め続けた。そのことが私の自信になっている。あなたも続けたら？」と諭し、ワーカーは仕事を続けている。

助けてもらったら、素早くお返しをする。これが両刀遣いの極意らしい。彼女は毎日近くの道路を散歩しているが、出会った人に声掛けし、おしゃべりを楽しむ。「それによって私は見守られているけど、逆に見守ってもあるのよね」。そうやって声をかけた相手が一人暮らしで寂しい思いをしていた高齢女性で、「こうやって声をかけてくれる人がいるなら、もっと外に出よう」と感動させたこともある。

私の問題は私が関与する

銭湯で見つけた一客の服をたたむ女性

冒頭で紹介した、銭湯に通って客の服をたたむことで心が落ち着くらしい認知症の女性。この女性の行動を見て、人はいかにして自分の問題に取り組むのかに気がついた。そこでこういう短文を考えた。

私の問題は他人にはわからない。

その解決策も他人にはわからない。

だから私の問題には私が関わる。

たしかに自分の抱えた問題は、他人にはわかるまい。その問題をどう解決したいかも同様だ。銭湯に行って服をたたむなどという解決策は、本人以外のだれも思いつかない。ならばどうするか。自分が自分の問題にストレートに関与する。自己福祉である。そう言えば、地域でよく見かけるちょっと変わった人というのは、まさに自己福祉をしているのだ。自

分の問題なら、そう間違ふことはあるまい。自分が自分に福祉する。毎日地域を歩き回り、あちこちのグループに行つて「入れて」と言つている認知症の女性がいる。またある女性は、早朝にご近所宅に押し掛けて「ピンポン」と鳴らす。何事かと出てみると「ヌカミソの作り方を教えて」。今述べたように、その問題の正体は他人には分からない。本人は無論承知しているのだらう。だから本人からしたら、解決の方向は間違つてはいまい。ただ他人にはわからないだけなのだ。

このことを知つてから、地域のさまざまな「？」の行動の意味が分かつた気がした。

それ以上に納得したのは、福祉問題というものは、究極のところ、他人に分からないものだということだ。だから支援をする人は、本人がやろうとしていることを上手にサポートすれば、手っ取り早く、また正解に近い支援ができる。私たちはこれまで、本人の気持ちを無視して、勝手に動き過ぎていた。福祉とは、まず自己福祉のことだった。

先ほど統合というキーワードを使ったが、この場合の統合は、1人の人間の中で「担い手」と「受け手」が合体している。これ以上の統合はない。冒頭の例のように、担い手と受け手が外でつながる場合、まだ完全な統合とは言えない。ところがこっちは、体の中で一体となっている。

考えてみれば、他人の尊厳がどのように傷つけられているのかは、本人にしかわからない。それを専門家の人たちがあれこれ確信めいた観察をしているが、果たして本人も同じことを考えているのか。これは、前の事例の、銭湯の話とつながっている。結局、地域の問題というのはまず本人が自分の問題と捉えて、自分で対処する。問題を社会に放り投げて任せるのではなく、当事者である自分の中に取り込んで、自分の責任で対処する。それがいかに難しかろうが、銭湯のように本人は必ず行動に移すのではないか。

